

## 論文

# 幼小接続期における伝承物語の読み聞かせの意義と提案 —読書活動教材の試案—

國府田 祐子

The Significance of the Reading Folklore Tales during the Connection Period of the  
Nursery School and the Early Elementary School Education:  
A Proposal of Teaching Materials for Reading Activities

KODA Yuko

## 要 旨

本稿の目的は、小学校国語教科書の第1, 2学年に掲載のある読書活動教材の傾向を明らかにし、伝承物語の具体的な一話を取り上げて読み聞かせの試案を提示することである。就学前教育では、物語は児童文化財の一つとして扱われているが、伝承物語に触れる機会は減っている。接続する小学校では、国語教科書には物語がたくさん紹介されているが、配当時間や紙数の制約がある。調査の結果、伝承物語は各教科書会社とも一定数以上掲載されていることが明らかになった。そして発達段階と集団の特性を踏まえた読み聞かせの試案を作成することができた。

## キーワード

読書活動教材, 令和2年版小学校国語教科書, 読み聞かせ, 指導の試案

## 目 次

- I. 研究の課題と手法
- II. 調査結果
- III. 掲載の多かった伝承物語
- IV. 試案作成の方向性
- V. 教材「さんまのおふだ」の概要と指導の試案
- VI. 結論と今後の課題

注

文献

## I. 研究の課題と手法

### 1. 問題の所在

物語の学習指導において、各学校で多様な取り組みが行われている。国語の教科書では、単元の終わりや巻末に本の紹介ページがあり、子どもたちの読書活動が活発になることが期待されている。だが紙数の制約等があるため1冊あたりの紹介は小さめになり、子どもたちへ強い印象を残しているとはいえない。子どもたちを主体的な読書活動に促すためには、担当教員の工夫が必要である。

国語の授業以外では、子供読書活動推進計画の策定を受け各学校で読書計画が作成され、司書教諭を中心とした取り組みが行われている。計画をもとに図書室に子どもたちを連れていくと、自発的に本を選べない子どもは一定数存在する。子どもと直接関わる担任教師の役割は大きいといえる。

就学前教育における児童文化財の一つとして、物語は盛んに扱われている。家庭での読み聞かせについては、未就学児の頃に読み聞かせをされていた子どもはその他に比べて本を読む割合が高く、高学年まで読み聞かせを継続した家庭の子も同様に、割合が高いとの調査結果が出ている<sup>注1</sup>。そこで、小学校国語教科書(低学年)で紹介されている読書活動教材に着目し、その中で昨今触れる機会の減っている<sup>注2</sup>伝承物語を積極的に扱うための、読み聞かせの方法を提案する。

### 2. 研究の目的と方法

昔話などの伝承物語を与える意義を踏まえ、教科書に紹介されている本の傾向を明らかにし、子どもたちへの提示の一方法としての読み聞かせについて提案する。方法として、小学校国語教科書に掲載されている伝承物語について調査し、伝承物語を読み聞かせる際の効果的な指導方法について考察し、試案を提示する。

## II. 調査結果

### 1. 調査の方向性

幼稚園教育要領や小学校学習指導要領では、ひとくりに物語という語が使われているが、物語はそれ自体が独立した一分野として存在しており、範囲は非常に広い<sup>注3</sup>。そこで本稿では、物語を発生的な見地から創作物語と伝承物語に大別した。作者の分かっている物語を創作物語とし、民話や昔話のことを伝承物語として分類していく。

### 2. 創作物語と伝承物語

物語を発生的な見地から見ると、創作物語と伝承物語に大別することができる。『国語教育研究大辞典』の「物語教材」の項には、伝承物語は「昔話の再話などによって出来上がった伝承的な内容の物語」とあり、創作物語には「創作による個性的な物語」とある。同書の民話の項には、「庶民の間に伝えられていた口伝えの話(民間説話)であり、訳語としては、英語のfolktaleがこれに相当する。昔話・動物昔話・笑い話・形式譚などが含まれる」とあり、伝承物語の項には「庶民の口伝えで語り伝えられた物語。昔話、民話(folktale〈英〉, Volksmärchen〈独〉, conte populaire〈仏〉の訳語)などとも言う。(中略)作者のわかっている物語は創作物語と言い(中略)伝承物語とは全く別の近代文学」とある<sup>1)</sup>。

本稿では民話や昔話のことを「伝承物語」と統一して表記し、この観点をを用いて、令和2年版小学校国語教科書<sup>2)</sup>に掲載されている物語を調査した。

### 3. 調査範囲

#### 1) 調査範囲

令和2年版小学校国語教科書第1学年上・下巻及び第2学年上・下巻、計16冊および、各教科書会社ホームページ<sup>3)</sup>

#### 2) 調査の仕方

- ①読書活動教材や巻末教材の扱いで、表紙だけが紹介されている伝承物語を一覧にした。
- ②表紙がなく、本の題名や作者のみの紹介だった場合は数に含めなかった。

③表紙があり、複数話が掲載されている本は、1冊として数えた。

④同一シリーズの本の紹介があった場合は、表紙のある1冊だけを数に含めた。

### 3) 分類上の留意点

再話は創作物語ではなく伝承物語に入れた。整理にあたっては出版社から出ている情報を参考にした。神話や伝説は伝承物語に分類している。

## 4. 調査結果と考察

### 1) 冊数と割合

表1 教科書に掲載される読書活動教材のうち  
伝承物語の占める割合

教科書会社	全体数 (冊)	伝承物語 (冊)	伝承物語 ／全体数 (%)	日本の 伝承物語 (冊)	外国の 伝承物語 (冊)
学校図書	121	22	18.2%	10	12
教育出版	149	36	24.2%	21	15
東京書籍	177	33	18.6%	23	10
光村図書	129	23	17.8%	8	15

(2020.9 筆者作成)

### 2) 傾向

各社、約120～180冊の範囲で掲載があり、最も冊数が多かったのが東京書籍であった。各社とも単元の学習後に関連書籍が紹介され、読書活動への促しへ工夫がされている。またどの教科書でも「読書のへや」(学校図書)、「としょかんへいこう」(教育出版)のように、読書活動そのものを単元化しており、読書への促しが期待されている。

### 3) 伝承物語の傾向

伝承物語については計画的に掲載されていた。特に教育出版では、第2学年下巻末に「むかしのお話を読もう」という項目で見開き1ページで紹介があり、掲載冊数も多い。また、日本の伝承物語とともに世界の伝承物語の掲載もあり、国名はイギリス、ロシア、インド、エジプト、中国など多岐に渡っている。

## Ⅲ. 掲載の多かった伝承物語

第1・2学年上・下巻を通して、多くの教科書で掲

載されていた伝承物語は下記の通りである。( )内は国名である。

### 1. 教科書会社4社で掲載

#### 1) ももたろう(日本)

すべて福音館書店からで、文・松井直、画・赤羽末吉である。学年は第1学年上・下、第2学年上・下である。

### 2. 教科書会社4社中3社で掲載

#### 1) 三びきのやぎのがらがらどん(ノルウェー)

3社とも出典は福音館書店の瀬田貞二訳から転載されている。3社すべて第1学年上に掲載されており、幼小接続の視点がうかがえる。

#### 2) プレーメンのおんがくたい(ドイツ)

2社が福音館書店出版、1社が偕成社からののである。すべて第1学年で掲載されている。

#### 3) ヘンゼルとグレーテルのおはなし(ドイツ)

3社ともBL出版からである。第1、2学年で掲載されている。

#### 4) ジャックと豆(まめ)の木(イギリス)

3社とも出版社が異なっている。すべて第1学年で掲載されている。

#### 5) おおかみと七ひきのこやぎ(グリム童話)

3社とも福音館書店の瀬田貞二訳から転載されている。第1、2学年で掲載されている。

#### 6) ねこのおんがえし(日本)

3社ともら書店から転載されている。すべて第2学年で掲載されている。

#### 7) てぶくろ(ウクライナ)

3社とも福音館書店の内田莉沙子訳から転載されている。第1、2学年で掲載されている。

#### 8) 王さまと九人の兄弟(中国)

3社とも岩波書店から転載され、第1、2学年で掲載されている。

#### 9) 十二支のはじまり(日本)

3社とも教育画劇から転載されている。東京書籍は同名の小学館からの本も載せている。

#### 10) さんまいのおふだ(日本)

3社とも出版社、再話者が異なる。再話は松谷みよ子、水沢兼一、千葉幹夫である。すべて第2学年

で掲載されている。

## IV. 試案作成の方向性

### 1. 取り組みの現状

読書活動教材に子どもたちが触れていくために、担当教員が積極的に提示する例はいくつかある。教科書に新しく掲載された本はその年のうちに予算化され、図書室にコーナーとして設置される例もある。

このように行政の支援がある一方、学級で担任教師が読み聞かせる際にはいくつかの難しさがある。1点目は、その物語をすでに知っている子どもが集団に含まれている場合である。熱心な家庭は日常的に家庭で読み聞かせをしてもらっており、就学前の幼稚園や保育所において紙芝居等で親しんだりしている子どももいる。初めて聞く子どもが楽しんで聞く中で、筋や結末を知っている子どもが聞くことに飽きてしまったり、途中で筋を遮る言葉を発してしまったりすることもある。一方、長時間の集中がもたない子どももいる。担当教員は読み聞かせをする上で、何らかの工夫をする必要がある。

難しさの2点目は、読書活動教材に充てられる時間数の少なさである。読書活動そのものが一単元を構成する場合もあるが、大抵の読書活動教材は、関連する単元の末尾のページに小さく紹介されているのみである場合が多く、子どもの印象に残らない上に、その物語を読み聞かせるために配当されている時間はわずかである。積極的に読み聞かせをしようとする担任教師は、そのための時間を新たに作り出す必要がある。

以上のような問題点を解消するための視点と、指導の試案を提示する。

### 2. 読み聞かせの途中で区切り、発問を投げかける

親や保育士が一对一で読み聞かせ場合は、子どもの反応に応じることが可能だが、小学校の担任教師が集団に向かって読み聞かせる場合、個人差に応じることが困難である。

中には、物語の結末まで集中力が持続できない子どももいる。特に、ワーキングメモリの小さい子ども

もは、最後まで課題や教材についての説明を聞くのは難しいとされている。湯澤正道らによると、ワーキングメモリの小さい子どもに対して効果的な支援の一つに、具体的な選択肢を教師が提示して発問することであるという<sup>4)</sup>。これを読み聞かせの途中で行うこととする。選択肢は二者択一としてシンプルにし、発問を投げかける前に二つから選ぶことを予告する。また、発問として投げかける言語そのものも短く、わかりやすいものにし、発問の数そのものも少なくする。

選択肢の設定は、初めて聞く子どもにとっては、イメージを広げ、先の展開を楽しみに聞く学習になる。すでに筋や結末を知っている子どもにとっても、読み聞かせを聞きながら自分の記憶をたどり、記憶の一致や不一致を確認しながら聞くことになる。細部まで聞き取る大切さに気付かせる学習にもなる。

### 3. 選択肢は、子どもの論理的思考の発達を踏まえる

選択肢を立てる際には、子どもの論理的思考の発達を考慮する。日本の小学校第1、2学年である7歳児について、チップ・ウッドは「時間、空間、量についての概念を、より高度に理解し扱うようになる発達段階にあるという<sup>5)</sup>。そして就学前・第1学年に該当する6歳児については、「物の差異に気づいたり、違いがどのようなものであるか考えを補ったり」する推論が始まる時期であると述べている<sup>6)</sup>。このような初歩的な論理的思考の発達段階にある小学校低学年に対して発問を設定するには、論理的思考の基礎からとなる大小、濃淡、上下のようにはっきりとした違いがあり、比較対照しやすい選択肢が有効である。論理的思考の発達段階を踏まえた選択肢は、物語の既知・未知という前提の異なる子どもを引き付けることができると考えている。

## V. 教材「さんまいのおふだ」の概要と指導の試案<sup>注4</sup>

筆者はこれまで子どもたちに与える物語として、冒険があり、終わりがハッピーエンドとなる物語の効果について論及してきた<sup>注5</sup>。今回はこの「冒険」と「ハッピーエンド」の二つの観点を備え、かつ教科書



に掲載数の多かった伝承物語から「さんまいのおふだ」を選び、読み聞かせの試案を提示する。

関圭吾によると「三枚の札(ふだ)」の話はほぼ全国的に分布している<sup>7)</sup>。令和2年版小学校国語教科書4社のうち、読書活動教材「さんまいのおふだ」は、教育出版<sup>8)</sup>、東京書籍<sup>9)</sup>、光村図書<sup>10)</sup>で第2学年に掲載されている。

## 1. 「さんまいのおふだ」のあらすじ<sup>注6</sup>

物語は、山中へ冒険に行きたがる小僧に対し、保護者である和尚が3枚の札を授けるところから始まる。この3枚の札は魔法を生み出し、いざとなったときに身を守ることができる札である。山姥に捕まり食われそうになった小僧は、3枚の札を使って山姥から逃げようとする。1枚目は、便所に札を置き、札に代わりに返事をさせ時間稼ぎをする場面で使う。2枚目は、追いかけてきた山姥の足止めのために大川を出す場面で使う。3枚目は、同じく足止めのために大きな砂山を出す場面で使う。3枚の札を使い切り和尚の寺に逃げ帰ったところで、山姥は和尚と対峙する。結末は、和尚が山姥に知恵比べを挑み、山姥を小さな存在に変えて飲み込むという筋である。

## 2. 選択肢の設定する場面・その1

### 1) 小僧が2枚目の札を投げ「大川出る」と唱える場面

小僧が札を使って逃げる途中の、2枚目を使うときに設定した。1枚目に便所で札に代わりに返事をさせたが、それが見破られ、2枚目として何を札にお願いして逃げようとするのか、聞き手の子どもたちが楽しみに聞く場面である。聞き手の子どもたちは3枚の札をもっていることを把握しているので、まだ展開の先がある2枚目のところで設定する。

### 2) 選択肢「大川出る」・「大川」

実際の物語では、小僧は「大川出る」と唱える。大川から想像できる水に対する物質として、「火」である「大川」を選択肢とする。チップ・ウッドは、7歳児は空間的概念を理解し扱えるようになる発達段階であると述べているが、この年齢は、学校のカリキュラムでは自然科学や社会科学の素地を養うことを目的とする生活科の学習があり、身の回りへの世

界に対する興味が増している時期でもある。大水(大川)も大火事も、どちらも山の中で起こる大規模な災害であり、札が生み出す魔法の威力の大きさに対して、子どもたちのイメージが広がりやすいと考え設定している。

### 3) 発問例

「次に小僧は、2枚目のお札を使います。何とて頼んだと思いますか。今から言う二つのどちらかに手を挙げましょう。1番、大火事出る、2番、大川出る。」さて、どちらだと思いますか。

## 3. 選択肢の設定・その2

### 1) 和尚が山姥に、「小さな納豆になれるか」とそそのかす場面

物語の結末部で設定する。小僧が3枚の札を使い切り、寺の和尚のもとへ逃げ帰ることができた場面の直後である。3枚の札を与え、魔力を備えている和尚自身が呪文を唱える場面は、多くの子どもたちを惹きつける。ここが山姥と和尚の知恵の戦いの山場となる。

### 2) 選択肢「小さな納豆」・「大きな竜」

実際の物語では、和尚は山姥に対し、「一粒の納豆」になれるかとそそのかし、無限の力をもった山姥が虚栄心からただちに変身し、納豆となったとたん和尚に食われる場面である。選択肢の設定に当たっては、「小さな納豆」に対比して「大きな竜」とし、論理的思考の基礎となる大・小を強調した。大小による比較対照を際立たせる選択肢は、多くの子どもたちに物語の結末を強く印象付けると考えた。

### 3) 発問例

「(筆者注：和尚と山姥は)わざくらべをすることになりました。和尚は山姥に、何になってみろと言ったでしょうか。今から言う二つのどちらかに手を挙げましょう。1番、大きな竜になってみろ。2番、小さな納豆になってみろ。」さあ、どちらだと思いますか。

## VI. 結論と今後の課題

今回は創作物語と伝承物語に大別し、伝承物語の下位分類として神話や伝説などは細分化していないため、その整理については今後の課題である。伝承

物語の中には、数え歌などがもとなっている物語も存在することから精査が必要になってくる。

読書活動教材としての伝承物語の掲載は、各教科書で一定数以上はあることがわかった。今回はその中の一話を取り上げ試案として提示したが、他にも教科書会社同士で重複して掲載している物語は多くある。それぞれの物語の特徴を踏まえた試案を作成する方向である。

今回の試案とした、途中で区切りながら行う読み聞かせは、多くの子どもの集中力を持続させる可能性が高く、そこへ論理的思考の発達を生かした二者択一の選択肢を付加することでさらなる効果があると考えている。今回は6、7歳児の論理的思考の発達段階を踏まえた選択肢を提案したが、同様の発問は8歳児に対しても有効ではないかと推測している。読み聞かせには、小学校低学年以外の指導の場面でも多くの可能性がある。今後は今回の試案の検証とともに、小学校中学年へ対する研究も視野に入れていきたい。

本研究は2020年度松本大学研究助成を受けている。

# 注

- 注1 文部科学省「平成30年度子供の読書活動推進計画に関する調査研究」報告書、文部科学省、pp.87-90(2019). [https://www.kodomodokusyo.go.jp/happyou/datas\\_download\\_data.asp?id=62](https://www.kodomodokusyo.go.jp/happyou/datas_download_data.asp?id=62)(閲覧日2020.9.8)
- 注2 小山祥子、「乳幼児の言葉の育ちに関する現状と課題(2) 一家庭と保育の場における『おはなし』の現場から―」、『駒沢女子短期大学研究紀要』45, pp.31-38(2012)。
- 注3 例えば、Andrew Edgar, Peter Sedgwick編、富山太佳夫他訳『現代思想芸術辞典』青土社(2002)、「物語／語りnarrative」の項(p.365)によると、「言葉を構造化し、連続性のある整然とした様式で出来事を語り伝えるようにしたもの。(中略)物語は、語られる出来事と出来事との間の構図的な関係、出来事の時間的な流れ、物語の中に存在する時間の流れ、語り手の視点と調子、語り手と読者の関係、語りそのものの働きなどによって作り上げられる。」とあり、石下忠・今泉淑夫他編『日本思想史辞典』山川出版社(2009)「物語」の項(p.980)によると、「ものがたる、口誦文芸のこと。諸氏族によって伝承された語りごとであり、(中略)題材としては、最初は神話・伝説のような事実そのものではなく、架空の事柄を扱ったものが多く、虚構である。」とある。このように研究領域それぞれの切り口によって物語の定義は多様であり、一つにまとめることは困難である。
- 注4 「さんまいのおふだ」の指導について筆者は、平成27年版小学校国語教科書を使った実践経験をもっている。ただしこの実践時とは元となる再話者が異なり、教具も絵本ではなく、単元の扱いも令和2年版と異なっていたため、今回、大幅に変更し試案として提示している。日本言語技術教育学会東京神田支部編『誰でもすぐ授業ができる新型学習指導案集―伝統的な言語文化編』、「三まいのおふだ」pp.21-24, 私家版(2016)。
- 注5 光野公司郎、國府田祐子、「幼稚園「領域」言葉」における伝承物語の位置―物語指導の根幹となるものとして―』『共栄大学教育学部研究紀要』5, pp.1-14(2020)。
- 注6 松谷みよ子・文(童心社)を元にしてしている。他の2冊については、千葉幹夫・文(小学館)は、大きな砂山と大きな川の提示順が逆である点だけが異なる。水沢謙一・文(福音館)では3枚の札をくれるのが「便所の神様」で、3枚の札は逃亡中の3回(大山、大川、大火事)で使う点が異なる。全3話とも、札の枚数や札を使って小僧が障壁を出して逃げ延びようとすることや、和尚と山姥が知恵比べをして和尚が勝つという結末は共通しており、物語の全体構造は同じであると判断している。

## 文献

絵本 さんまいのおふだ』小学館(2010).

- 1) 国語教育研究所編、『国語教育研究大辞典』，「物語教材」「民話教材」「伝承物語」各項，pp.826-828, pp.806-807, pp.611-612, 明治図書(1991)。
- 2) 鶴田清司他『みんなとまなぶしょうがっこうこくご一ねん上』学校図書(2020)。鶴田清司他『みんなとまなぶしょうがっこうこくご一年下』学校図書(2020)。鶴田清司他『みんなと学ぶ小学校こくご二年上』学校図書(2020)。鶴田清司他『みんなと学ぶ小学校こくご二年下』学校図書(2020)。田近洵一他『ひろがることばしょうがくこくご一上』教育出版(2020)。田近洵一他『ひろがることばしょうがくこくご一下』教育出版(2020)。田近洵一他『ひろがることば小学国語二上』教育出版(2020)。田近洵一他『ひろがることば小学国語二下』教育出版(2020)。秋田喜代美他『あたらしいこくご一上』東京書籍(2020)。秋田喜代美他『あたらしいこくご一下』東京書籍(2020)。秋田喜代美他『新しい国語二上』東京書籍(2020)。秋田喜代美他『新しい国語二下』東京書籍(2020)。甲斐陸朗他『こくご一上かざぐるま』光村図書(2020)。甲斐陸朗他『こくご一下ともだち』光村図書(2020)。甲斐陸朗他『こくご二上たんぽぽ』光村図書(2020)。甲斐陸朗他『こくご二下赤とんぼ』光村図書(2020)。
- 3) 学校図書「みんなと学ぶ小学校国語・教科書のご案内・紹介図書一覧」<https://gakuto.co.jp/kyokasyo/15s-kokugo/>(閲覧日2020.9.1)。教育出版「令和2年度版 小学校教科書のご案内・ひろがる言葉・小学国語・紹介図書一覧」[https://www.kyoiku-shuppan.co.jp/2020shou/kokugo/category04/download.html#download\\_07](https://www.kyoiku-shuppan.co.jp/2020shou/kokugo/category04/download.html#download_07)(閲覧日2020.9.1)。東京書籍「2年度用小学校教科書のご案内・国語・各種資料・教材出典一覧」<https://ten.tokyo-shoseki.co.jp/text/shou/kokugo/introduction/download.html#section3>(閲覧日2020.9.1)。光村図書「授業に役立つ！ サポート資料室・資料・出典一覧」[https://www.mitsumura-tosho.co.jp/kyokasho/s\\_kokugo/support/#shutten](https://www.mitsumura-tosho.co.jp/kyokasho/s_kokugo/support/#shutten)(閲覧日2020.9.1)。
- 4) 湯澤正通，湯澤美紀他「クラスでワーキングメモリの相対的に小さい子どもの授業態度と学習支援」『発達心理学研究』24巻3号，pp.380-390(2013)。
- 5) チップ・ウッド著，安彦忠彦・無藤隆訳「成長のものさし『7歳』」「成長のものさし」，図書文化社，pp.90-91(2008)。
- 6) 前掲同書，「成長のものさし『6歳』」，p.77。
- 7) 関敬吾「古層説話」『日本の昔話 比較研究序説』，pp.180-184，日本放送出版協会(1977)。
- 8) 松谷みよ子文・遠藤てるよ絵，『松谷みよ子むかしむかし』さんまいのおふだ』童心社，1993，改訂新版(2008)。
- 9) 水沢謙一再話・梶山俊夫画，『さんまいのおふだ(日本の昔話)』福音館書店(1985)。
- 10) 千葉幹夫文・早川純子絵，『日本名作おはなし